

「手は後から」

先日、偶々テレビのスイッチを入れたところ、野球で名声を馳せた往年の 400 勝投手、金田正一氏の左腕から繰り出す球のスピード、変化、そして意表を突いた投球フォームが映っていた。実に見事で迫力があり、美しいものであった。そのフォームをみると居合の切下し「真っ向」と共通するところがあるので思うところを述べてみる。

金田投手は、気迫を漲らせモーションを取り、ボールを握った左手首を左腰下に取り、右肩は打者に向かい攻めの体制、腰を先に出して捻り、後から腕が綺麗な弧を描いて追いかけてゆくフォームである。即ち、手が出ていない。

このときボールは、指でしっかりと握り、ボールが離れる瞬間、腰、太腿、脛、爪先、上体、肩、腕、手首、指、を使い、後ろ足でプレートを蹴りボールに全身体を乗せ、あの速球となり、変化球となっている。

居合の「真っ向」を金田のフォームと照らし合わせてみる。

- ① 振り被ったとき柄は手の内にシッカリと納め(神傳流)、五指にそれぞれの役割をさせ、
- ② 剣尖が手より先に出て、大きく綺麗な弧を描くように振り出し
- ③ 物打ちが敵に当る瞬間、腰・太腿・脛・爪先・上体・肩・腕・手首・指・そして、後ろ足の蹴り出し、指の締めで物打ちにパワーを乗せる。

ここらがピッチャーと居合の共通点だと思う。ゴルフのスイングにしても、腰が先で手が先ではない。野球のバッターでも同じことが言える。

最近、私が考えていることがもう一つある。それは、パラボラ曲線と居合の「抜き付け」との関係である。

パラボラ・アンテナに電波が当たると、その跳ね返った電波はどの面にあたっても或る一点に集まる。

居合で抜き付けた剣尖も、どこから抜いても一点に集中する抜き方があるように思う。これは今後、稽古を通しての楽しみでもある。

皆さんのお考えをお教え下されば幸甚であります。 了